

令和7年3月7日

令和6年度 学校評価報告書

宮城県立支援学校女川高等学園
校長 浅水 啓一郎

1 教育目標

一人一人の人格と個性を尊重しながら、生徒の特性に応じた適切な職業教育を行い、自己の持つ能力や可能性を伸ばし、社会的・職業的に自立できる心身ともに健康で、誰からも愛される生徒を育成する。

<今年度の努力目標>

- (1) 生徒一人一人の実態に応じた学習指導・生活指導・進路指導の充実
 - ・社会的自立に必要な知識、技能等の獲得 ・自己及び対人関係における対応能力の強化
 - ・生徒同士、生徒と教師、生徒と地域社会との対話
- (2) 地域を理解し、地域に貢献できる生徒の育成
 - ・近隣小中高校、関係機関との連携 ・地産地消を踏まえた食育の取組 ・地域の文化行事等への参加
- (3) 特別支援学校のセンター的機能の充実と理解啓発
 - ・教育実践の情報発信による特別支援教育の理解・啓発・普及
 - ・地域の小中高校のニーズに応じた相談、研修支援等の実施
- (4) 地域と共に学ぶ防災教育の充実
 - ・女川町や県内の被災地との連携を図る実践的な防災教育の展開 ・防災ボランティア
 - ・校舎内外の環境整備 ・安全な通学路の確保
- (5) 学校運営協議会の推進
 - ・地域と共にある学校づくりを推進する仕組みの構築 ・魅力ある学校づくりの推進
 - ・教育活動の内容を効果的に発信する取組

2 全体分析について

全体分析は、以下の基準でABC評価し分析を行いました。

評価	基準
A評価	「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」が90%以上
B評価	「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」が70%以上～90%未満
C評価	「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」が70%未満

【分析】

評価者	回答者数	項目数	A評価	B評価	C評価
生徒	53	28	23	5	0
保護者	49	34	34	0	0
教職員	48	36	28	8	0

[※対象生徒・保護者 各53名(1年19名、2年16名、3年18名)、対象教職員 49名]

3 考察及び課題と改善策について

生徒、保護者、職員の三者において実施し、いくつかの項目でB評価という結果になりました。そのB評価の項目について、さらに詳細に数値を拾っていくと、A評価（肯定的な評価が90%以上）には及ばなかったものの、すべての項目で肯定的な評価が80%以上に達しており、概ね適切な学校運営を行うことができたのではないかと考えております。各学年・分掌部においては、集計結果及び自由記述と教職員間での反省とを照らし合わせながら詳細分析を行い、次年度に向けての課題と改善策を検討していくことで確認しました。

生徒評価では、5つの項目でB評価という結果になりました。その中で肯定的な評価が最も低かった項目（84.9%）がNo.19「**地域の方々と一緒に、防災について学ぶことができている。**」でした。本校では、寄宿舎の生徒自治会を主体として地域の方にもご参加いただく「総合防災訓練」を継続して実施してきているものの、今年度は生徒数の減少や前年度の反省をもとに行事の実施態様を変更した結果、特に新しく入学した1年生を中心に、地域の方と交流して防災について学んでいるという実感が得られにくかったのではないかと捉えております。改善策としては、開校10年目を迎え、過渡期にある「総合防災訓練」について、より効果的な実施方法を模索するとともに、行事を活用するだけでなく、年間を通して防災について地域とともに学んでいけるような防災教育指導計画を検討していきたいと考えております。

また、B評価になった5つの項目のうち2つの項目が、学校及び寄宿舎の学習・住環境整備に関する内容でした。自由記述欄にも生徒からの様々な要望が挙げられております。施設・設備の充実ということなので、限られた環境・予算の中で実現可能なものについては、前向きに検討を進めていきたいと考えております。

保護者評価では、全ての項目でA評価という結果になりました。日頃の教育活動に一定の評価をいただけたこと、大変有難く受けとめております。引き続き、連絡帳等での情報共有や、お便りやホームページを通じた情報発信に努め、生徒を中心とした学校と家庭との協力体制を維持していきたいと考えております。

一方で、自由記述では部活動の様子をもっと知りたいという要望が挙げられました。保護者の方におかれては、中学校の部活動と比較し、活動規模や学校生活における比重についてギャップを感じることもあるのではないかと捉えております。生徒の余暇活動の拡充につながるような取組を各部毎に工夫していくとともに、前述のような情報発信に努め、本校の部活動の様子について保護者の方のご理解をいただいきたいと考えております。